



新局玉石童子訓
卷十

1219
25



新編 玉石童子訓卷之五下冊

第四十回 吾足齋盃と奉て往事と詳小を
晩稻袖と拂て獨園門と正くま

登時辛踏元四郎の吾足齋延明の朱之八と宿六等ふらち對て目今も
いふ所如く珠へ咄乾兒を又宿六更へ俺渾家阿百の老芋を舊識を
今ゆら何と欲隠え俺上の箇様々如此々の事ありとて言詳小説示
まも朱之八も宿六も耳と敬けてうら听く原這個辛踏元四郎寧成の父の
辛踏息蒼と喚做して陸奥函信夫の郡信夫の御を遊園生を然世
る方御あるあらねと家傳の田圃十餘町あり是より其家置一から彼
身ハ半農半醫者あり程本妻ハ生せる獨子元四郎が年七八歳の
け餘夏の時候妻ハ時疫を身故りけり人の家ハ婦人ハ白く離れ許し候



新編 玉石童子訓 卷之五下冊

新編 玉石童子訓 卷之五下冊

況十歳中も足名稚子と父親の身單りて字養はれぬれは真養は己と必す
後妻と娶りて一家兒と任用せける程に元四郎が稍成長隨小生さ中と母の
慈多る子も亦孝順るされば動もまれば口舌起りて四隣を鬧るるに便あり
けれども真養是と制し給む肚裏は思ふや右中も左も元四郎と這地方に在ら
せたる俺家一日も安らざるを姑且彼身と遠離て又艾術もあらんと元四郎只
然に氣をく京師へ登りて遊学せんと路費程と取らざるを舊縁ありける日
野西殿へ消息たてまつる其子の上と憑きまつりける然に元四郎寧成に継母の誘
言と最朽惜く思ふとも威勢辞ふと給む遂に京師へ赴きて日野西中納言兼
頭卿の扈從もろ雜掌の如くおのける事の光景第一集二集小見えたる如し
今后又年と歴て元四郎が継母陸奥之身故りてとゆえし小這時父真養存ハ
歳七旬の翁ありて萬事成就て不便ありける親元四郎消息なくは

又理故御の還りて俺と資助よとある郵書京師へ届け来れば元四郎稍地味飲
ひて辨頭卿とて京へ奥へ退くとある程に漫小阿夏の色も感みて尚総角の
珠之众と君家小苗に在らざる事の樹と誘果と阿夏と俱と陸奥の
信夫の御へ還りぬける事の顛末は又是第二集小説次は元四郎今あらぬもあら
ん然程に辛踏元四郎の當時逆旅の日数歴て舊里信夫小近づく程に阿夏が
事ある小撰りて親の允さぬ妻と一も京師へ取女りとて親も所親も告
らせ今あらぬ正しにも多所為へいれぬと鬼難て家小還着ぬ日其夜阿
夏との客店小苗に在らせ元四郎一箇信夫の家小還來てゆふ是と前小
葺の老病既小身小通りと鐵多薬餅の驗る命危折りければ所親へ
る疎らぬ御黨相飲いて有来事と云と告て病床へ伴ひるとも真養存ハ
類中でのふふ不便なれども今元四郎が還り来ればと見て喜び涙を流

枕方ははらへて霜の朝も鳴く虫よりの哀声と絞出して後ののど云云と
いふもまれと舌強りて一言半句も安定ならぬ執事と聞取る余應のよき慰め
たる元四郎是は便宜とゆき當晩阿夏と里稍盡処多客店より召取りて親
も亦所親中詭して俺身京師に在り一時兼頭卿小給事と女房と這回錢
別は妻おせんと賜りて己とを將て還りんと誠しやふ告知するを真
其事的好歹と訂せむもあらざれば所親も不の字との由
皆面出うと祝けり是より統小一日と経て息算竟身故りけり送
葬の事佛事追薦都て元四郎が隨意せむのみ。家史奴婢三四各あり
家傳の田圃十餘町あり況貯録の金思ひよりも少らぬと元四郎都て受納
是より後月額と剃髪と飲頭願ふ做濟し其心願の日より
親の名と紹て辛踏息算と自稱する醫者も家業あるものと裏京師小

在り一程彼身名醫不負及して学ゆるふわられ匙ハ親や及ねども地
方久しに醫生生え療治せむ者絶ぎて西三稔と歴未ける阿夏が腹小
子の出来ね元四郎の息算猶飽心地と養子せやと思程辛踏の家小
舊縁あり似我ハと寒民の夫婦うち續けて世と去りた跡年七八歳なる
獨女兒のまゝと憑下親族をければ件の高見親似我ハの店保人某甲の家歌居
も其保人も最貧し者をも憐む下件の女兒ハ娼妓と售れんと人の噂も
知らる息算是と不便思ひてみづる其保人許りて件の孤女を目を赤顔
添て髪を膏脂を塗る形貌を變れ其眉目ハ勝れ成長る後々々
傾圜の本色とせよとあつと思捨つた心あり恥て保人甘本甲が舊縁と告げ
高量して養女の一説敷き俗の親不知の約束を保人某甲が手断金
程よく取らる後為の證書を取送り其日件の女兒と將て宿所還りて事

云云と阿夏も其告知らるる小阿夏も勢ひ愛慕を湯浴を結髪をせめて猛
 可新の衣裳を製して被せると是も其名を改て晩稻と呼び習ふは
 歌舞何れも遊藝への習する其費官給わぬ別又後の真茶其本
 性親似も酷く酒も嗜む故に客を愛く家業の専ら飾る故に敗
 況も悪く費も厭を世の常言に似る者夫婦といふ阿夏も是歌妓を
 浮るのふそを賢くもたれ人の妻のく内を政ち新炊の損益を心を用る性も
 良人と其酒を貪りて食好とせざる目も有る上も衣裳欲しく流しと旨
 と考れも其将人の縫せて糸針とふたも取らぬ然る所要を折も良人と其
 夜も深し良人と其朝寝して猶暇も随小兒晩稻の教ぬ折も筑紫茶を極
 鳴し三弦を弾て身の勤まの餘は只朝夕彼身の元道結髪時の程を
 知らざりける夫婦かの如ふも五七年を送る程は所帯も驕奢の氣使減しく

親の禪り田圃又曾典典とせしむるも借財の元も真茶が人と成り素
 よる浮薄の性も既の人々を東西の財主の債りと物も思ふ這時件の
 頓蛇女晩稻の年五五郎の稀る美女を媒妁とて嫁縁と欲する者
 けれども真茶敢兼引我女兒の數萬貫を四守城王あつたる
 女婿かせ要るのたと誇るの筋を借財の債りも分説術竭て錢欲とを思
 ふも又縁談と誼する者あり抑這信夫の御西箇の豪家あり西小居の
 西岳氏も東原氏も因て土人彼も稱て西の長者東の長者と喚
 做る其西岳某甲が妾を欲すると晩稻の媒妁する者あり真茶の債ら由
 是佛計盡す折るれ敢又尋思不及先他と四見して金と借るも
 か一誤り及び其意不任て晩稻と飽き粧飾を初見参不遣しけり
 地不救して俗の支度料をも金百兩と贈られけり真茶則是を以て免れ

借財の債と僅小果を程小東長者の支を傳聞するや昔の今も両
 雄の雙立る物の中れ西の負下とを思ひに俺其晩稻と妻を又媒妁見よ
 晩稻が衣裳調度の料金百五十兩と贈りか真茶茶是も受納して諸方の借財の
 折々も還さず毎小飲食の友と集合し只酒醺遊樂の夜と日小接する其
 見等の只管真茶茶催促して又蝨く今愛と王家入るをぬと其懈りと責れをも
 真茶茶噪ぐ氣色も或病着或月の障りありと約束の日と延まの遺失うも
 あふれ東西の媒妁見等初疑い後比皆謀られけりとも腹立て云合ねと東西
 齊一辛踏の宿所来て憶つて聲の高くるま其怠慢と責罵れも真茶茶阿
 容るる色も何々と冷笑して噫噪や汝等思ひ天不測の風雨あり人小不測の疾
 病あり假令約束ありとも晩稻一向病着小打即ち争何甘非除一年三箇

月支遅々及ぶとも我等困窮ありと氣長く等ねと果むその虚言なりは
 御目来る時今愛の背影を見しと知らむ詩も語もいらむ疾渡一後と一箇が又一
 箇が喘立し訛聲振立て咱等既小先約ある女見一人と東西一折賣小吉又
 あり開下濟む里正許牽りて思ひ知り甘又蝨く立ねと曳立ると鳥計技と突
 仆さるるを捉る東の媒人先約後約知らねも咱等花主西より支度料小
 五十兩の増金あれ西へ遣らむ這方へ渡せ然らむと主人の中捕籠て挑争ふ慾
 界の風波噪ぐ口舌の海小玉と採らぬ志渡の延戸取次小狂小程もあむ奥集
 合し真茶茶の酒内の悪友漫して素破支あり共侶小敬鳥立る酒氣小乗と櫻戸
 開吐也々々と跳り理不盡小件の西箇の媒人目鼻もさるを敷く小吐
 びて起ると蝨く肩腰小登蒐りて蹂躪れ小媒人等小頭顱と傷れ板
 折して血塗れ平張る百の騷劇小四下る里人等走來て或口西箇の痰負見を

腹心の人を頼む衣裳調度は活却未其價四千金なり。一かべ則是と懐小
 去て女兒晚縮と共侶の行装を教て領主の沙汰を俟て。有徳而次の日里正故
 老翁が来て領主の下知を傳へて阿夏宅の戸帳を比皆里等も相渡しく。晚
 縮と俱しく立去て里盡處を良人の俟程。是日辛踏息茶甘と二百報を。腕
 追放せられ計り。阿夏晚縮も逢と。絶然の當晩近郊を。白屋宿宿を
 投めて谷傷の瘡を俟む。任方孰處と定めぬ。京師の方心當次の日。路次を急
 ぐ。尚西岳東原の徒の先度の遠恨復え。追蒐來ぬ。支もやと思ふ心の安らぬ。人
 馬稀る。同道を走ると。西三日。是日。都て山路。鳥路。熊徑。幽る。頃。歳梢の
 孟。天寒く。雲雪。催。風。暴。來。れ。稍。羅。似。る。死。屏。風。と。建。保。如。山。又。山。と
 登。り。親。子。各。背。汗。を。一。歩。一。歩。の。艱。難。あり。百。歩。百。歩。の。苦。患。堪。げ。不。可。
 晩。縮。咽。喉。の。渴。く。と。只。管。水。を。飲。ま。れ。も。這。頭。人。家。遠。く。茶。店。あ。る。べ。い。な。ら。ず。

己とと流るる。陰流る。石滴。見半。阿夏。準備の腰着。碗。温。可。汲。合。り
 去。卒。も。晚。縮。飲。ま。れ。晚。縮。最。昔。一。之。飲。と。い。ま。半。分。空。ら。ぬ。忽。地。舌。強。り
 面色。衰。り。て。仆。れ。と。ま。阿。夏。目。是。を。驚。駭。て。晚。縮。と。抱。抱。停。め。叫。び。て。良。人。告。知。ら
 せ。れ。息。茶。も。放。馬。さ。る。先。其。脈。を。診。て。約。莫。太。山。嶂。氣。あり。又。其。水。を。蛇
 毒。あり。意。不。晚。縮。蛇。毒。あり。水。を。飲。す。中。あ。ら。む。と。い。ひ。四。下。を。見。入。る。其。頭。光
 たる。松。の。枝。も。最大。蛇。蛇。三。四。掛。り。て。あり。か。阿。夏。毛。骨。竦。ま。ぬ。丈夫。の。言。の。違
 ぬ。感。さ。る。と。樹。と。知。ら。む。當。下。直。息。茶。又。い。ま。今。這。蛇。毒。と。解。ん。ぬ。良。藥。醫。術
 香。の。優。者。や。又。白。柿。の。中。に。俺。信。夫。の。宿。所。の。鹿。射。香。龍。腦。這。那。と。多。く。使用
 餘。も。あ。ら。ぬ。這。逆。路。を。争。何。い。せ。と。い。ふ。阿。夏。其。頭。不。脱。落。の。ゆ。り。む。か。し
 往。る。日。宿。所。に。立。去。る。と。り。錢。も。な。し。藥。種。も。比。皆。の。囊。小。合。龍。で。腰。に。着。る。と。り
 末。に。鹿。射。香。の。藥。も。な。し。と。い。ふ。と。い。ふ。と。又。蝨。く。の。囊。と。解。開。し。東。東。形。る。薬。合。盒。



庵



冬枯れて
石坂
まどりの
山路かれ
琴鶴

晩稲甦生
まて二親蛇
蛭小駁く

お志松

おいそ

會出く渡まき息其弁受會て奇妙々々嘆賞多々。件の鹿射香と思ひの積
 撮合て晚稻が古小袋回飲塗きりら猶も咽喉吹入れてら守と在程の晚稻の
 一聲呀と叫びて水と吐くと二三合忽地我れ復りて心地清爽なりといふ阿夏は
 然こそ飲びて鹿射香の即效云と告ると息其推禁りて有徳る太山蛇毒母の
 必豺狼も出づく山家の害怕多きや誘白く入ると急ぎて幸くく山を下りて
 這宵の山脚の客店天と明くと猶急ぎ去向へ都て驛路を二日申々の旅
 宿も多し既小京師の近ぐ程有一日息其弁阿夏晚稻の譚を語り。這より京師へ
 赴きて番頭卿の憑票さび恥と知らざる者も似たり。別京師の戦馬の買來て王室は早
 ありし。播紳達も衣食足らぬ西の都小菓も易ぬ。勘らむと云えり。馮一が
 ぬ故主の身と寓せて人の胡慮あるらる。近江の観音寺へ行くよかめれ。關守近江
 判官佐々木高頼主の武威隣國を威服して室町殿を補佐表也。観音寺

城下の敏赤昌京波速の傳れり。是表の俺京師の在。時那藩中の人々相識られもる
 兄あらむ。先や那里に赴きて便宜と徴めて生涯の謀と做さむ。欲と澤家の意いふぞ
 やと問へ阿夏は異議もなき。然るべし。応に息其弁隨即密着と將て観音寺の城
 下へ赴けり。津回屋と客店小杖と駐りて。相応に借屋を求る。去歲の果敢る
 逆路の暮て春正月の初旬ふるぬ。津回屋の東隣の門口二木あり。借屋の庭
 のあり。土蔵も借ひて。二月上旬の程徒者。この時元四郎の卒踏息其弁は五足齋
 延明の名を改め阿夏は老芋と呼易らる。良人の医業と資助。是まその諸雜
 費の息其弁阿夏が陸奥と立去時。活轉ける衣裳調度の價四五十金あれ。斯てそ
 直息其弁の吾足齋の療治人並にわけて。観音寺の城内へ折る。出入る程。小晚稻が美
 女ると知りて。病もる。少年輩の開を見ん。為小吾足齋許。あつ湯液とていふ
 あり。開が中。佐々木家の権臣。三賀典膳政朝の家男。志賀政政。政政と喚

命危あり時白柿と云く切て煎と五六月と用る程其人酷く水浴と
蛇の肛門より降ると見ると約一寸許の断離して首尾續く者あり。是より神
茶と用ると一七日あて本復すと。當時人保つてあり。疾白柿と求むると
老若の教養て猛可の人と央ひると隣國美濃遣て大垣加納る。白柿を
買て買合せて煎と晩縮の飲する。十日あまら不及とも是も亦功と悪瘡亦
臭氣小堪ね五足齋疑惑て原来晩縮の悪瘡の蛇毒あわゆる秋と思ひて
今も施す奇方と知らぬ夫婦齊一旦暮小神佛祈る。酷暑も堪ぬ六月の
時候人ありて吾足齋告る。撰津國住吉の下衿宜の家無名の悪瘡の妙薬
即效百發百中と云ふ。医師と外の其思ふくもあらず。今愛の爲る。討
めぬ。吾足齋是とて其匙盡すと云ふ。敢亦疑を。蛇老若の商置
を。俺みづも。仍其の慌。往還五六日の旅宿と云ふ。住吉小赴て件の衿宜の

宿所と向ふて末意と告て悪瘡の妙薬と求る。王の衿宜答る。其の妙薬は
開は錯ひる。我家之然る悪瘡の妙薬と賣らむ。先祖も傳來ある。奇姓
藥方はある。然れど秘する。約莫無名の悪瘡の百藥。経験る者。小栲神
一枚と細末ゆて用れ。御書物ふ心さる。如く立地。其瘡愈て痕。家あま。做れ。其
其藥種の。和殿。醫師。無礼。栲神。千歳。枸杞の根。の化。と狗の
形。做れる物。是。京浪。速。茶店。淋。瀝。あり。せ。非。如。あり。高。料。ら。ふ。
百金。猶。廉。多。勉。て。尋。ね。ら。う。と。言。町。寧。小。誨。れ。五。足。齋。思。ひ。似。て。不。重。
と。失。ふ。の。ら。奇。方。と。切。て。の。幸。る。け。り。と。思。ひ。入。ら。主人。謝。て。浪。速。
二。更。延。虫。崎。坂。勿。論。京。大。津。ま。藥。店。の。限。り。漏。れ。限。り。適。遠。て。栲。神。や。
ると尋る。元は何もの物と云ふ。と向復。其名。知る者。あらず。五足齋
齋因果。て只得宿所。か。阿夏。の。老。若。晩。縮。も。支。云。と。告。知。ら。せ。老。若。の

額と病まの計の所と知り當下吾足齋阿夏又の當り。俺當言はけるあり。這果
程遠らぬ二村落。枸杞村と喚。做まの。其一村の皆枸杞也。其れも盡る。生
生茂るも意ふ。件の枸杞村中。枸杞神とて。莊客の是あり。其れも。縦令所
藏の者も。も。枸杞の根と穿ら。枸杞神とて。其れも。俺那村の箇
由相識あり。箇様々。計して。利誘。我望。遂る。も。わ。老
ち。心許。空。在。左。右。計。以。果。吾足齋再議。及
紙。前。牌。為。枸杞。神。求。る。趣。價。百。金。買。と。果。枝。寫。氏。
心。利。者。央。持。枸杞。村。遣。則。件。の。紙。牌。村。人。背。門。柱。或。門。前。多。松。栢。
軒。と。貼。せ。り。秋。七。月。の。時。候。其。後。八。月。の。中。浣。不。至。て。思。ひ。か。け。た。池。邸。多。宿
六。及。引。之。枸杞。神。と。て。晚。稻。の。惡。瘡。立。地。の。瘡。一。の。を。朱。之。女。小。再。會。の。飲。い。盡。した。
无。四。郎。の。五。足。齋。阿。夏。の。老。芋。が。未。麻。告。実。事。の。信。地。を。今。朱。之。女。と。宿。六。も。夫

婦の身の上云々と詳説示さる及び己の支の推隠しく。必と節り人を慮。己の
賢多如く云。晴ゆる長談。脩話。朱之女。宿六。の。心。ま。の。果。て。俱。感。嘆。ま。り。は。
當下五足齋阿夏の當り。俺始も枸杞の價。金百兩と定め。他人の物。買。と。小。果。
今幸。枸杞。神。と。珠。之。女。の。も。他。が。為。女。弟。多。晚。稻。の。惡。瘡。瘡。瘡。便。足。
家の支る。何。價。と。論。を。元。弱。以。輩。の。金。持。せ。無。益。の。使。果。及。
其身の害。多。然。と。も。俺。其。金。と。惜。む。中。珠。が。為。所。縁。と。求。り。相。心。し。る。當。り。
俺百金。五。十。金。其。雜。費。と。添。買。と。先。と。這。と。あ。り。て。又。宿。六。也。阿。夏。
老。芋。と。舊。縁。の。も。と。珠。と。我。日。後。養。食。て。料。に。案。内。と。せ。れ。か。其。飲。い。あ。る。の。
報。い。せ。ま。い。ら。ぬ。老。芋。小。目。と。注。ま。れ。老。芋。の。早。く。あ。る。て。軀。納。戸。の。銀。は。一。時。
あ。り。金。三。分。紙。中。裏。と。と。来。ふ。け。れ。五。足。齋。受。合。て。備。あ。り。け。る。黒。漆。の。箱。に。小。
ち。載。て。是。と。宿。六。の。薦。を。か。き。更。と。あ。る。些。少。の。憶。を。骨。と。お。せ。る。俺。教。ひ。の。打。記。

る。の。突。納。あ。れ。か。と。い。ふ。と。是。を。見。る。宿。六。も。朱。之。次。の。立。腹。と。壓。難。の。黙。然。と。思。ひ。入。り。て。い。ふ。岩。根。松。の。集。る。鳥。の。宿。巢。の。あ。ら。ぬ。宿。六。の。噫。思。ひ。入。り。て。い。ふ。御。賜。と。い。ふ。思。ひ。入。り。て。い。ふ。酒。の。醉。醒。て。肚。裏。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。胸。神。と。い。ふ。朱。之。次。の。賣。せ。る。其。價。の。割。十。兩。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。押。し。促。織。と。い。ふ。胸。神。と。い。ふ。朱。之。次。の。賣。せ。る。其。價。の。割。十。兩。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。何。夏。の。舊。識。と。い。ふ。熟。善。轉。と。い。ふ。甚。を。甚。許。の。金。と。い。ふ。飲。と。胸。の。恨。の。數。と。い。ふ。鎮。り。て。只。得。法。々。の。件。の。金。と。受。戴。り。て。い。ふ。御。心。使。の。預。り。は。と。い。ふ。胸。懐。楚。と。扱。り。て。不。思。と。辭。之。か。り。去。ら。ま。ま。這。時。既。日。の。暮。な。れ。五。日。足。齋。老。芋。の。敢。又。強。く。留。り。て。い。ふ。隨。の。不。思。と。納。り。て。送。の。辭。誼。口。誼。料。ら。と。い。ふ。珍。客。と。い。ふ。不。用。之。意。の。七。十。七。日。の。月。出。て。晝。の。如。く。明。く。お。挑。燈。と。何。せ。ん。珠。刀。祢。話。説。も。あ。ら。ぬ。暇。あ。る。折。末。の。ね。娘。と。造。作。の。り。の。り。と。告。別。と。い。ふ。阿。夏。の。老。芋。と。朱。之。次。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。遠。く。

紙。燭。と。兼。て。共。侶。の。金。圓。を。送。り。け。る。是。よ。り。て。未。朱。之。次。の。五。日。足。齋。の。宿。所。の。歌。居。程。の。拘。神。の。價。百。金。と。浴。邊。與。れ。る。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。色。中。の。朝。の。吾。足。齋。の。教。と。受。て。藥。の。調。合。の。預。り。夕。の。母。親。老。芋。と。賣。り。て。新。炊。の。事。の。代。り。萬。事。精。悍。の。奉。勤。の。底。意。と。曉。ら。ぬ。吾。足。齋。阿。夏。の。老。芋。の。愛。飲。び。て。好。食。客。と。い。ふ。最。憑。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。小。程。の。五。日。足。齋。延。明。の。晝。裏。の。賀。志。賀。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。小。晚。稻。の。惡。瘡。の。故。を。と。り。て。その。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。遺。憾。と。思。ひ。入。り。て。い。ふ。病。架。の。為。招。り。て。觀。音。寺。の。城。内。へ。赴。く。毎。人。の。對。して。説。誇。る。晚。稻。の。惡。瘡。平。愈。の。願。未。拘。神。の。即。功。云。云。と。其。精。妙。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。拙。女。晚。稻。が。病。着。の。原。是。蛇。毒。の。中。ら。ぬ。無。名。の。瘡。の。出。来。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。微。癩。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。花。の。毛。虫。の。世。の。醜。と。い。ふ。薄。情。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。如。も。あ。ら。ぬ。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。言。徇。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。雨。夜。の。月。の。雲。の。時。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。今。と。そ。の。人。の。疑。い。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。解。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。自。向。自。合。の。の。り。の。思。ひ。入。り。て。い。ふ。又。可。也。

五二〇五二二川卷二
十三

好む仕校の語接はしめて傳へての限りやうか多賀志賀政賢を父
政朝あつぐ如此と告て晩あね縮と取らまを然れども政朝あつぐ許さ先吾口足齋の
對面して屢問試あつぐ事の虚實の彼人の心術も知らず一急ぐとわと推禁禁
次の目病病あつぐ假托て吾足齋と招あつぐ吾足齋の時未あけと心情地あつぐ歩て走
てそ智の宿所あつぐ主劑と調進あつぐ休藥の後々日毎政朝と訪
さうさうあつぐ只願あつぐ媚説あつぐ陪堂の如ふありけり不題復説未朱之あつぐ思ひども
五口足齋の宿所あつぐ光陰と過あつぐ程あつぐ晩縮あつぐの容色世あつぐ優れてまあつぐ見
まあつぐ舊病あつぐ發りて己の狂あつぐ猿馬と鎮あつぐ二親の目とあつぐの調戲あつぐけき言
葉と吐あつぐ長あつぐ袂あつぐと曳あつぐ毎あつぐ晩縮あつぐ酷あつぐくら腹あつぐ立て其あつぐ拂あつぐ物あつぐ顔
根あつぐ走退あつぐ現あつぐ處あつぐ趣あつぐさるあつぐ信あつぐとああつぐ思ひ悔あつぐ朱之あつぐ懲あつぐまあつぐ
猶あつぐ便宜あつぐと窺あつぐ程あつぐ有あつぐ一日五口足齋の朝あつぐより出あつぐていあつぐかへあつぐ阿あつぐ百あつぐの老あつぐ芋あつぐや

いぬ頃津向屋の物贈らまあつぐ鉄あつぐいあつぐのあつぐ背あつぐ門あつぐより出あつぐておあつぐ朱之あつぐ双あつぐ折あつぐとぬあつぐ
中の圓あつぐ衣あつぐ縫あつぐ居あつぐるあつぐ晩縮あつぐと矢庭あつぐ掖あつぐ捉あつぐて口説あつぐと晩縮あつぐの吐あつぐ嗟あつぐと叫あつぐびて力あつぐ涯あつぐ衝あつぐ小
ああつぐの貌あつぐと正あつぐとくあつぐ意あつぐ無あつぐ斬あつぐやあつぐ調戲あつぐのあつぐ人あつぐふあつぐとあつぐもあつぐもあつぐ一あつぐ度あつぐさあつぐまあつぐ二あつぐ度あつぐさあつぐまあつぐ根あつぐ根あつぐ
まあつぐ見えあつぐああつぐの奴家あつぐの奴身あつぐの女弟あつぐまあつぐと忘あつぐれあつぐの鉄あつぐ鳥あつぐ辭あつぐへあつぐ罵あつぐるあつぐ阿あつぐ爺あつぐの原あつぐ是あつぐ他人あつぐ
起あつぐらあつぐ冷あつぐ笑あつぐひあつぐてあつぐまあつぐのあつぐ女あつぐもあつぐ鳥あつぐ辭あつぐるあつぐ俺あつぐの母あつぐと骨あつぐ肉あつぐをあつぐ阿あつぐ爺あつぐの原あつぐ是あつぐ他人あつぐ
況あつぐ汝あつぐの娘あつぐ女あつぐ也あつぐ女弟あつぐの兄あつぐ也あつぐ非あつぐ除あつぐ縁あつぐ一あつぐのあつぐ敷あつぐ糸あつぐれてあつぐ兄あつぐと呼あつぐれあつぐ妹あつぐと喚あつぐも
養あつぐ嗣あつぐ夫妻あつぐとあつぐ世あつぐ間あつぐ是あつぐありあつぐ今あつぐらあつぐ何あつぐをあつぐ禁あつぐ忌あつぐとあつぐ縁あつぐんあつぐ又あつぐ汝あつぐのあつぐ悪あつぐ瘡あつぐ百
薬あつぐ驗あつぐるあつぐもあつぐ一あつぐのあつぐ拘あつぐ神あつぐとあつぐ贈あつぐれあつぐるあつぐ俺あつぐのあつぐ生あつぐらあつぐらあつぐ蜘蛛あつぐ化あつぐるあつぐ腐あつぐ滅あつぐふあつぐ死あつぐぬあつぐ
らあつぐんあつぐ俺あつぐの命あつぐの親あつぐるあつぐ其あつぐ大あつぐ恩あつぐと思あつぐふあつぐ最あつぐ強あつぐ面あつぐはあつぐ甚あつぐ麻あつぐふあつぐとあつぐ謹あつぐむあつぐとあつぐ曉あつぐ
縮あつぐのあつぐああつぐきあつぐ開あつぐのあつぐいあつぐらあつぐとあつぐ養あつぐ嗣あつぐ夫妻あつぐのあつぐ二あつぐ親あつぐのあつぐ隨あつぐ意あつぐをあつぐ推あつぐ辭あつぐふあつぐ由あつぐりあつぐ
護あつぐらあつぐぬあつぐ妹あつぐとあつぐ伏あつぐのあつぐ約あつぐ束あつぐせあつぐんあつぐ是あつぐ不あつぐ美あつぐ又あつぐ拘あつぐ神あつぐとあつぐ贈あつぐれあつぐるあつぐ不あつぐ利あつぐのあつぐ為あつぐりあつぐてあつぐ奴

家と義女弟あり。と知れ故あつたれば。因におはせしむる。只利のこころをも果せ。朱之
从の晩稻を信と疾視て。少女の似けなき強情。多辯。俺身今を零落。其今
業平と申す。諶れて思ひを被。少女の背見せられ。例の事。意未はら。賀政
賢の嫻談を。知りて。襟の附ゆをあらせむ。と詰るを。立まき。暮。晩稻を遣ら
おと被留。と。暗やと。たろ。結尺の。打と拂へ。女子の甲斐なき。困とせ。ゆる。折ら
足然と。庭門の。蹄形木履の音。すそ。朱之。父の。母親の。かへ。けり。と。見入る。
身と。内め。と。去。閑。出。て。藥。と。切。と。も。當。下。晩。稻。の。乱。れ。る。髪。搔。揚。る。雨。後。の
水。澄。ぬ。ら。る。を。然。氣。さ。る。母。と。迎。へ。小。土。瓶。を。茶。と。汲。取。て。薦。を。ど。き。る。程。の。吾
足。齋。の。笑。け。け。外。面。の。還。り。来。て。老。芋。と。納。戸。へ。招。か。れ。て。叫。く。と。半。响。許。其。後
中。の。間。の。立。出。る。朱。之。父。と。口。の。空。う。珠。よ。听。ね。好。吉。あり。俺。今。日。城。内。の。賀。賀。殿。へ
参。り。小。政。朝。主。譚。ら。る。明。日。の。君。侯。馬。見。所。の。出。せ。し。當。以。潘。郎。の。少。年。輩。其

武藝の勝負二十番と御覽め。と仰ら。是。因。て。兵。頭。高。嶋。石。見。の。好。純。が
請。宣。示。と。し。り。あり。其。所。以。の。好。純。の。宿。所。の。武。者。修。行。の。兩。少。年。還。留。ま。る
在。り。其。武。藝。の。達。者。也。好。純。と。舊。縁。是。あり。明。日。の。敷。手。劍。ふ。召。加。え。ら
る。う。も。や。と。口。曾。願。い。宣。示。ま。よ。り。君。侯。隨。即。御。許。容。あ。り。て。件。の。兩。少。年。を。ど
其。數。加。え。ら。る。と。和。老。の。宿。所。の。乾。兒。未。朱。之。父。と。後。喚。做。と。社。伎。の。還。留
ま。て。在。る。ふ。わ。ら。む。也。年。の。幾。成。る。や。ら。武。藝。の。本。事。あ。る。今。よ。り。君。侯。の。許。え
上。て。明。日。の。隊。の。召。入。れ。て。ん。勿。論。衣。裳。武。器。を。ど。の。志。賀。の。副。衣。を。貸。て
向。合。せ。ん。の。甚。甚。麼。と。問。ひ。か。が。已。答。宣。示。ま。ら。る。と。承。た。れ。造。化。の。と。い。ふ
と。松。郎。未。朱。之。父。の。今。茲。二。八。の。弱。輩。也。武。藝。の。人。並。あ。せ。い。え。然。る。を。明
日。の。敷。手。劍。ふ。召。入。ら。し。め。い。つ。實。の。あ。る。幸。也。第。一。の。修。行。の。る。べ。宜。く。願。ひ
な。る。と。當。坐。の。上。心。の。政。朝。主。も。其。本。意。あ。る。面。色。也。然。ら。ば。明。日。未。明。より。

和老其朱之从と俱して俺宿所の未の餘談の其折々りと頗りのいそが
立の暇まうら退出て走りかへり来りけり思ひかけたる幸あれども口心許る
和郎が武藝いりや俺其本事と知りされば胸安らざる所ありと云
朱之从のあまき忻然と含笑て腕と振りて答るる身を食其美心易れ
俺身十二歳ふくと福富の家在り一時就鳥津川作日高景市多と謀合ら密
密ら馬劍法槍法白打自得せむと云と事就中射藝ハ百發百中の段あり
とどのの量義大和在り一時一箭の拂々と射て仆く斧柄の必死の故以て明且敵
もい孰中のあれ何ぞの害怕いれと威勢猛く説誇れ老芋もあらず呆るまぬ教涯
であるの當下吾足齋又の俺僕見る珠の今茲二十歳を欲二下二二んと
多賀王の實と告む十六歳ふくと云い其身少年也武藝拔萃るる公團
守の賞感入ふ増て大祿とて御家臣あるまらざるやと思へ珠の病後の儘にて

今其月額と剃らりと幸あれ今日結髪と云ゆ折額髪と剃殘くと元の大
立里成るとも優貌され相応して見て怪む者さるる疾鼓湯浴来て来よ身装
をゆるぎをさるる一箇の不足の俺の醫師の珠の賞と云袴を老芋隣家へ
適一適て己の時可の袴を借りて来て明日の都合を噫開くと栄利の爲我ら
單使る現小人の時とる貌も果敢く薄い富貴の宿習の水の中も只是僥
倖と被てを願ふ開か中晩稻の教が氣色を納戸に在りて出ても来ぬ水之分無礼を
憎とのぞと吐ける是より下り衆少年の數を劍の段を構教を涯にあり者
自由あるがら又編と續巻と改め後板を鐫著る下葉前文を改めたり
仍の両少年は是何人なるぞ看官早く猜しけんいれどもある大江社四郎月夜
染六郎通能が武名と觀音城内は揚ねる夏之光景の像と云ふは
のら猶詳知らず欲さる亦是後の一巻の編次るを俟候か



あ六郎
みちう



通能勇を
奮て暗賢
を雌伏を

朱之丞
なるかこ

十七
十八
十九
二十

三石
三石
三石
三石

○新局玉石童子訓第二板代稿画工筆工目次

綉像畫工

一陽齋後豊國



代稿

澤正次

淨書筆畊

谷金川

新局玉石童子訓第三板

上帙五冊 下帙五冊 當巳の年内 開板

開卷驚奇俠客傳第五集

上帙分卷五冊 下帙分卷五冊 近刻

○家傳神女湯

ゆわらの湯 法庵の妙薬 一包代百洞

○精製奇應丸

大包代金糸 中包代金糸 小包代五下 七下より不仕

○熊胆黒九子

くまのけんと丸 一包代五

○婦人死虫の妙薬

ついでんごころん 後あめりや 小用は言のれい 一包六

製薬本家 四谷隠士

瀧澤氏

弘所元徳町中坂下南側方老店の向 丸死沢氏

童子訓猶多編るを今も後年々々作翁の
乞求めて續刻遅滞ありとて終不全編成
さるの必遠るを其を遠近賜顧の君子
先きの記を認めて春日秋夜の枕の伽り
あるまんとを惟ねるといふ
書肆文溪堂敬白

代稿作者

澤清右衛門

弘化二年乙巳秋八月發行

心齋橋筋博勞町角

大坂書肆

河内屋茂兵衛

江戸書肆

大傳馬町貳丁目
丁子屋平兵衛板

